



一井すみれ (1993-) 主題が変わったように感じるが、制作に対する根底意識に変化はない。技法やイメージの問題ではなく、画面に向かう力を感じる。まずは自分の為に描き切り、その上で他者の視線や美術史、現在の動向について向き合えばいいのではないかと。時間は未だ未だ沢山ある。
大塚麻美 (1984-) 絵画への追求がより一層なされている。描こうとしても自らの想像力が実現されていないと悩むことがあるのかも知れないが、描けないことを前提にすることが、描くことそのものへと導いていくのかもしれない。
小出恵理奈 (1986-) 絵画とは何かを作品の根底においている。色、形、速度、イメージ、思想。だからこそ描くだけではなく、研究を続ける必要がある。最悪の今日、絵画は何故必要なのか。絵画はこれから何をしなければならないのか。課題はきりがいいから課題だ。大画面を期待する。
瀧澤令 (1989-) 既にステップスで個展を開催、また更に創造力と空想力を駆使している。無茶をして欲しい一人。どのように見られるかなど問題にしないで欲しい。現代美術の可能性は無限だ。自己の想像力に、更に忠実であって欲しい。その為には、更なる無駄を繰り返す必要がある。
佐々木敬介 (1993-) 日本画を学んでもキャンパスにラッカーを用い、絵画のあり方を探っている。浮遊する絵画。未来へ繋がる思考。それを自ら育むために、何が必要なの

か。自己の課題に対して外の意見に耳を傾け、更に過酷な問題意識を自らに突きつけていくべきだろう。必ずできる。
田崎亮平 (1988-) 非常に美しい立体を制作する。彫刻にも建築にも定義できないその姿は美しいが、この美しさで止まってしまっている。これは一体何だ。本当にこれでいいのかというほどの、未知の物体の創出を目指す、と自ずと自らの作品の美しさの異相を見出すことが可能になる。
甲斐千香子 (1987-) ステップスで個展を終えたばかりだが、旺盛に制作を続けている。描いても描いても描き切れないほどに描いているが、見ている身からすれば、未だ未だ描き足りない。技術や動機を変えるだけではなく、自らの存在理由を変容しても、直ぐには何も変わらないものだ。
MICHIRU (2015年大学卒業) 自らの想像力を忠実に描いている。その為には自己の力を過信するほどまでもっと信じ、技法よりも空間性と追求を追及するが如く果敢に画面に突進して欲しい。時には自己のイメージを破壊するののも一つの手段となるかもしれない。大画面で確認したい。
M・アンジェリッチ (1984-) セルビアから来て日本画を専攻した。自らの世界が構築されている。それでも日本画の技術を活かし、自己の視線を保持している。だからこそ、一度これまでの構築を破壊すべきかも知れない。すると世界の時空との格闘が必要となってくる。個展が楽しみだ。

